

シェンゲン圏拡大視察報告

— ドイツ、チェコ、ポーランドの国境地帯から —

中 島 大 輔

1. シェンゲン協定について—成立から拡大まで

1985年6月14日、ルクセンブルクのモゼル河畔のシェンゲンにおいて、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの5ヶ国は、国境の共同管理を定めた協定に調印した。このシェンゲン協定は1990年6月19日に正式に発足し、1995年3月26日にはこの間に協定に加わったスペインとポルトガルを含む7ヶ国で国境検査の廃止が実現する。以来シェンゲン協定は、人とモノの移動の自由という欧州連合(EU)の本質に関わる取り決めとして、欧州統合と軌を一にする形で拡大する。1997年にはオーストリアとイタリア、2000年にはギリシャ、2001年にはデンマーク、フィンランド、スウェーデンならびにEU非加盟のノルウェー、アイスランドも加盟し、シェンゲン圏は15ヶ国に広がる。

EUはその後2004年5月1日に10ヶ国を迎え入れ、25ヶ国に拡大する。このいわゆる「ビッグバン」はEU史上最大の拡大であったが、その意義は拡大の規模にとどまるものではない。それまで西欧に限定されていたEUに初めて旧

社会主義圏の中東欧8ヶ国が加わったという欧州再統合の意味が大きい。つまりEU東方拡大は「鉄のカーテンの終焉」であり「欧州分断の最終的克服」という歴史的意義を帯びていたのである。

しかしEU市民の大半がシェンゲン圏の中で自由な移動を享受している状況にあつて、既加盟国との間で自由な移動を阻む国境検査が依然として存在することは、新規加盟国の国民にとってEU内の二重構造と受け取られ、ともすれば「二級のEU市民」というある種の劣等感につながっていた。この意味で2007年12月21日の中東欧諸国へのシェンゲン圏拡大は、「2004年のEU拡大の総仕上げ」であった。¹ これにより、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、スロヴェニア、ハンガリー、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、及び地中海の島国マルタの9ヶ国、人口にしておよそ7000万の人々が新たに移動の自由の恩恵を受けることになった。EU東方拡大後も東西を分けていた見えない境界は、これによりほぼ完全に消滅し、24ヶ国のおよそ4億人の欧州市民に対して自由な移動を保証する均一の空間が誕生したのである。

¹ チェコのイヴァン・ランガー内相はシェンゲン圏拡大について、「欧州がもはや二つの階級に分かたれないことを示すもの」と述べている。また欧州委員会のフランコ・フラティーニ内務担当委員は、「私たちが目指すこの国境開放は2004年のEU拡大の総仕上げである。拡大は旅行の自由がなければ完全とは言えない」と拡大の歴史的ならびに実際の意義を強調している。(2006年12月5日AP通信ニュース“Ausweitung des Schengen-Raums frühestens Ende 2007”)

2. シェンゲン圏拡大のタイムスケジュール

新規加盟国のシェンゲン協定加盟は当初2007年秋に予定されていた。その際、国境を管理する所轄官庁のデータ交換情報システムをEU全体で更新する必要があった。ところが指紋などの生体情報を含む新たなシェンゲン情報システムⅡ（SISⅡ）の導入には技術的な問題があったため、既加盟国でさえも SISⅡの運用は2008年6月以降になると予想され、その場合、新規加盟国の加盟は2009年までずれ込む恐れも出てきた。この計画の遅延に対してはチェコなどから強い批判が上がった。²

そこでEUは2006年12月5日のEU内相理事会において、暫定的に従来のシェンゲン情報システム（SIS）を新規加盟国に導入し、半年間の施行期間を経た後、2007年12月31日にシェンゲン圏を中東欧の新規加盟国に拡大するというタイムスケジュールを決定した。³

このタイムスケジュールに従い、キプロスを除く新規加盟9ヶ国は2007年9月初めに拡大版SISに加盟し、国内法の改正など準備を進めた。その結果、10月1日に開かれたEU内相理事会では「すべての欧州市民へのクリスマスプレゼント」（EU議長国ポルトガルのペレイラ内相）として、シェンゲン圏拡大をクリスマス前に前倒しすることが原則的に承認された。ペレイラ内相によれば、前倒しは「準備がきわめて順調

に進んだ」ことによるという。⁴ その翌々日の10月3日にはEU議長を務めるポルトガルのソクラテス首相が12月21日の拡大を公式に発表している。⁵

この拡大期日は11月15日の欧州議会の承認⁶を経て、12月6日のEU内相理事会で正式に決定された。⁷ なお12月21日の国境検査廃止は陸路と海路のみであり、空港での旅券検査廃止は2008年3月30日とされた。

3. シェンゲン圏拡大前後の国境地帯

1) 12月20日 ゲルリッツ・ズゴジェッツ

さて筆者はゼミ生の北村尊義君と2007年12月18日にフランクフルト経由でドレーズデンに到着し、翌19日に東へおよそ60kmの古都バウツェン Bautzen に入った。バウツェンを本拠地としたのは、花崗岩の岩塊にそそり立つ独特の要塞都市のたたずまいと、スラブ系少数民族ソルブ人の中心都市という歴史的・文化的魅力に加え、鉄道で1時間ほどでポーランドやチェコとの国境地帯を訪ねることができるという交通の便による。

20日朝、バウツェンからまず地域間急行（RE）で東へ28分、ポーランド国境の町ゲルリッツ Görlitz を訪ねた。現在の人口は約57,000人。今でこそ大都市とは言えないものの、14世紀から15世紀には大青（藍色の染料）や布の販売、

² 2006年9月13日 AP 通信ニュース “Tschechien kritisiert Ausschluss von Schengen-Regelung”

³ 2006年12月5日 AP通信ニュース “Ausweitung des Schengen-Raums frühestens Ende 2007”

⁴ 2007年10月1日 AFP 通信ニュース “Grenzkontrollen zu Polen und Tschechien fallen vor Weihnachten” および同日の AP 通信ニュース “Schengen-Raum soll schon vor Weihnachten erweitert werden”

⁵ 2007年10月3日 AFP 通信ニュース “Grenzkontrollen zu neuen EU-Staaten fallen ab 21. Dezember”

⁶ 2007年11月15日 AFP 通信ニュース “EU-Parlament gibt grünes Licht für Erweiterung des Schengen-Raums”

⁷ 2007年12月6日 AFP 通信ニュース “Grenzkontrollen zu neuen EU-Staaten fallen ab 21. Dezember” および同日の AP 通信ニュース “Schengen-Erweiterung am 21. Dezember formell beschlossen”

ビール醸造によって繁栄し、人口は8,000人を数えたという。1346年以降はパウツェン、レーバウ Löbau、ツィッタウ Zittau、カメンツ Kamenz、^{オーバー}ラウバン Lauban とともに上ラウジッツ六都市同盟 Oberlausitzer Sechsstädtebund を形成し、盟主として同盟を率い、一定の政治的・経済的影響力を行使した。第二次大戦後は町の真ん中を流れるナイセ川が新たな国境とされ、町はドイツ側のゲルリッツとポーランド川のズゴジェレツ Zgorzelec に分断される。1950年7月6日にはポーランドと東ドイツの国境協定の調印式がゲルリッツで行われ、市民は東西分断の確定に立ち会うことになる。

しかしベルリンの壁崩壊後、国境の状況は一変する。1991年4月にはここでドイツ、ポーランド両国の政府委員会が国境地域の協力関係に関する協議を行う。以来ゲルリッツ、ズゴジェレツ間の交流は政治的、経済的、文化的レベルで着実に進む。国境地域の経済状況に関する協議、外国人排斥運動に反対する市民レベルの連帯、共同の青少年フェスティバルの開催、ドイツ・ポーランドの姉妹都市会議の開催などである。こうした国際的協力関係に対して、ゲルリッツは1997年10月、この年のヨーロッパメダルを受賞する。翌年5月には両市の市長が共同で「ヨーロッパ都市ゲルリッツ/ズゴジェレツ」宣言を発表し、両市議会の共同会議も開催される。以来、両市はそれぞれの都市名の前に「ヨーロッパ都市」Europastadt を冠する。⁸

さて奇跡的に戦災を免れた旧市街は、ゴシックからルネサンス、バロック、さらには世紀末のユーゲントシュティール様式の建物が立ち並ぶ。修復の行われていない建物も目立つものの、

全体としてはきわめて美しい歴史的街並みが保持され、ベストセラーとなったB. シュリンクの『朗読者』など多くの映画のロケ地に選ばれているのも頷ける。



ゲルリッツ 聖ペテロ・パウロ教会（国境の旧市街橋より）

^{ウンターマルクト}

下市場を抜けるとゴシックの二つの尖塔が聳える教区教会の聖ペテロ・パウロ教会にぶつかる。建物は13世紀前半のロマネスク時代の建築を15世紀末に5廊のホール式教会 Hallenkirche に改築したものであるが、その規模から中世後期のゲルリッツの繁栄が窺われる。

教会と大青倉庫^{たいせい} Waidhaus の間を抜けると、そこはもうナイセ河畔で、EUの資金援助を受けて2004年10月に竣工した旧市街橋（歩行者用橋）がかかっている。中世以来の渡河点にかかるこの橋は、ゲルリッツ・ズゴジェレツの一体性を象徴するもので、経済的・文化的交流の進展を祈念して2003年5月7日に起工された。この日は終戦直前の元の橋の爆破から数えてちょうど58周年にあたるという。ポーランドのEU加盟年の竣工という経緯も併せ、ヨーロッパ人の欧州統合に対する歴史意識が窺えよう。

欄干にはこの日の晩から翌日にかけて行われる式典に備えて、EUの旗を含むヨーロッパ各

⁸ 市の公式ホームページ <http://www.goerlitz.de/> より



国境の旧市街橋

国の旗が所狭しと飾られている。

対岸にはポーランドおよびドイツの国境警察官の姿も見える。私たちは最終日の国境検査を受けるべく橋を渡ったところ、ポーランドの警察官に「ここではなく上流の国境検査所に回るように」と告げられた。つまりこの橋はゲルリッツ、ズゴジェレツ市民の通行用であり、両市の市民に限って市民証の提示のみで通過できるのだという。外国人を含むそれ以外の地域の居住者は上流のヨハネ・パウロⅡ世橋たもとの国境検査所で旅券検査を受けねばならないという。ポーランドの警察官はにこやかに「明日、明日」と言いつて、翌21日からは外国人もこの橋を通して自由に越境できる旨を教えてくれた。



旧市街橋でのゲルリッツ、ズゴジェレツ両市民の国境通行

旧市街橋から10分ほど南に歩くとヨハネ・パウロⅡ世橋の国境検問所に着く。ドイツの係官は私たちが最終日のビザをもらいに来たのを知ると、笑顔でスタンプを押してくれた。ここでもゲルリッツ、ズゴジェレツの両市民は、ポケットやバッグからすばやく市民証を提示して、出入国審査を受ける私たちの傍を次々に通り過ぎていった。



国境検問所での旅券検査と市民の通行

この日の晩、旧市街橋の上ではドイツとポーランドの市民が集まり、氷点下5度前後の寒さの中、国境開放をともに祝ったというが、パウツェンに戻った私たちは残念ながら立ち会うことができなかった。また同じく国境のフランクフルト・アン・デア・オーダーでは、対岸のスウビツェとの橋の上に市民数千人が集まり、花火と紙吹雪で国境検査の廃止とポーランドのシェンゲン圏加盟を祝った。当地のヨーロッパ大学 Europa-Universität Viadrina Frankfurt (Oder) に通う両国の学生は、橋を行き来してドイツ・ポーランドの双方で深夜まで祝杯を挙げたと報じられた。

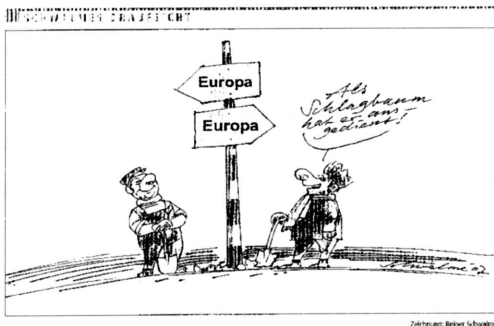
2) 12月21日 ツィッタウ～三ヶ国国境地帯

翌21日はパウツェンを朝8時11分に出発し、国境開放式典の行われるツィッタウへ向かう。

駅の売店で買った新聞 5 紙 (Die Welt, Der Tagesspiegel, Frankfurter Rundschau, Sächsische Zeitung, Lausitzer Rundschau) はいずれも一面トップでシェンゲン圏拡大を伝えている。



シェンゲン圏拡大を伝える新聞



「遮断棒としてはもう御用済みだ！」
2007年12月21日ザクセン新聞

興味深いのはザクセン新聞 Sächsische Zeitung の漫画である。「遮断棒としてはもう御用済みだ!」と、国籍の違う二人の男が国境検問所の遮断棒を道標代わりに地面に立てたところである。標識には左右に「ヨーロッパ (EU)」と行き先が書かれている。国境検査の廃止と隣

国のシェンゲン協定加盟を表している絵であるが、考えてみればポーランドやチェコはすでに2004年5月から「ヨーロッパ」なのである。つまりここでは「シェンゲン圏加盟=完全なEU加盟」と受けとめられているのだ。新規加盟国だけでなく、ドイツ側もこうした意識であることが面白い。

さてゲルリッツでラウジッツ鉄道に乗り換え、9時56分にツィッタウ到着。そこからタクシーフリーデンシュトラッセで平和通りの国境検問所に向かった。しかし私たちが10時過ぎに到着したときにはすでに式典は終了しており、メルケル首相らは次の式典の会場であるラトヴィアへと発った後であった。

新聞やテレビの報道によれば、式典には9時に始まり、欧州委員会のバローゾ委員長、欧州議会のペッテリング議長、EU議長を務めるポルトガルのソクラテス首相、チェコのトボラーネク首相、ポーランドのトゥスク首相、それにドイツのメルケル首相およびシヨイブレ内相が出席した。

メルケル首相は演説の中で、旅券審査の廃止は長年の切望であったこと、また国境が多くの苦しみ之源となったことを指摘し、今や人々はひとつのヨーロッパの中で自由に移動し、出会うことができると述べ、これはとりわけ美しい瞬間である、と国境開放を讃えた。⁹ トゥスク首相も今日は「自由の勝利」の日であると語った。¹⁰ バローゾ委員長は「私はこの地点が長い間鉄のカーテンによって分断されていたことを忘れることができない」。今や欧州は平和と自由のうちに結ばれた。「これはEUが政治家の構築物というだけでなく、市民のための機構であることを示すものだ」と述べた。EU議長

⁹ 2007年12月22日 Der Tagesspiegel 紙。

¹⁰ 2007年12月21日 AFP 通信ニュース “Merkel eröffnet in Zittau symbolisch Grenzübergang”

を務めるポルトガルのジョゼ・ソクラテス首相も、これは欧州が民主主義と自由の価値を平和のうちに祝う瞬間である。「これは欧州統合のプロジェクトのうち、最も偉大な瞬間の一つに数えられる」とそれぞれに国境開放の歴史的意義を讃えた。¹¹

式典はすでに終了していたが、なおも検問所前に残っていたドイツとポーランドの緑の党のメンバーに話を聞くことができた。その場で配布されていた欧州緑の党 (European Greens)、緑の党と同盟90 (Bündnis 90 /Die Grünen) およびポーランド・緑の党 (Zieloni 2004) の共同パンフレットによれば、緑の党は今回のシェンゲン圏拡大を3つの理由から全面的に歓迎していた。第一は国境開放により欧州統合が大きく前進すること、第二に国際的な鉄道連絡が改善されること、第三に市電レギオ・トラム・ナイセの実現により地域交通網の拡充がはかれることである。

第二の点に関して、ザクセン州緑の党のフランク・フォン・ヴェトケ氏 Frank von Woedtker はドレーズデンとポーランドのヴロツラフ (ブレスラウ) を結ぶ列車が1日に上り下りとも4便しか運行していないことを指摘し、姉妹都市である「両市の間を鉄道でもっと早く結ばねばならない。わずか250kmに4時間も5時間もかかっては意味がない」, 「ザクセンの州政府は高速道路を建設する意向であるが、鉄道の方が賢明だ」と主張していた。¹²



ドイツ、ポーランドの緑の党員と 左から2人目がトミャウオイチ教授

また第一の点に関しては、ナイセ川をはさんだポーランドとドイツ両国民の日常的な往来や経済活動によって、「それぞれの国民が単に並存 Nebeneinander するのではなく、共存 Miteinander する状況が生まれれば良い」との期待を語ってくれた。

続いてインタビューしたポーランドの緑の党のルドヴィク・トミャウオイチ氏 Dr. Ludwik Tomialojc も、同じく国境開放による地域レベル、国レベルの鉄道網の改善を希望していた。ヴロツラフ大学の自然史博物館の教授でもあるトミャウオイチ氏によれば、この地域の鉄道網はヴロツラフからフランクフルト・アン・デア・オーダーやライプツィヒへの直通列車があった第二次大戦前の方がむしろ良かったという。

トミャウオイチ氏はシェンゲン圏拡大について「もちろんきわめて肯定的に受け留めている。ヨーロッパがいま一つになったことをとても嬉しく思う。これは大きな歴史的瞬間だ。私たち (=ポーランド人) もこれで完全にヨーロッパ人になったのだ。(Wir sind auch jetzt völlig

¹¹ 2007年12月21日 AP 通信ニュース “Merkel : 《Ein wahrhaft historischer Moment》”

¹² ドレーズデン～ヴロツラフ間は直線距離で約230km。現在1日に往復とも地域間急行 (RE) が4便走るのみである。所要時間は4時間2分～30分 (いずれもゲルリッツ乗り換え)。ちなみに直線距離ではほぼ同じハノーファー～ベルリン間 (直線距離で約240km) は、インターシティー (IC, ICE) が1日に片道13便走り、所要時間は1時間40分程度である。

Europäer.）」と語っていたのが印象的であった。

各国首脳の式典とは別に、近くのドイツ・ポーランドの国境の橋でツィッタウとポラヨフ Porajow（ボガティナ市 Bogatyna）の記念式典が開かれると聞いたので訪ねてみた。橋には EU の旗を挟んでドイツとポーランドの国旗が飾られていたが、大きさが異なるのが手作りの式典を示しているようで微笑ましい。ツィッタウの消防署がグリュヴァインやスーブを参加者に振舞っていたので、私たちもご相伴に与った。式典は両市の市長や市民30～40名が集い、橋の真ん中でテープカットを行い、握手を交わすだけの簡単なもので、ごく短時間に終わった。市民らは橋の上で談笑した後、三々五々帰って行った。



ツィッタウとポラヨフの記念式典

ここでも式典の参加者に話を聞くことができた。インタビューしたツィッタウ国際大学のアルブレヒト・レール教授 Dr. Albrecht Löhr（経済学）は、凍てつくような寒気の中、長時間私の質問に答えてくれた。

教授によれば、新聞の見出しを飾る「国境を越えた新しい関係」などはすでに以前から始まっ

ており、今日の国境開放式典はむしろ象徴的なものに過ぎないという。2004年5月1日のポーランドやチェコの EU 加盟の方がもっと大きな意味を持っている。それにより国境検査も簡素化され、国境を越えた移動が促進されたからである。今日の式典は現在の状況を再確認する意味しかない、と語った。

ベルリンの壁崩壊後、国境を越えた交流が最も進んでいる分野は教育と文化であるという。レール教授が8年前より勤務しているツィッタウ国際大学は1993年に設立され、ドイツだけでなく近隣のチェコおよびポーランドの大学とカリキュラムや教員レベルで連携している。学生はおよそ300人。学生の出身国はドイツが約15パーセント、チェコが約25パーセント、ポーランドが約40パーセント、残りの20パーセントは他の中東欧諸国やバルト諸国出身で、学生の国籍は11ヶ国に及ぶ。¹³ 授業はドイツ語で行われるが、キャンパスではドイツ語、ポーランド語、チェコ語、英語などが飛び交うという。こうした状況についてレール教授は「相互理解はまず学生の話す言語と関わる。学生が多くの外国語を話す状況は好ましい。他の国について研究や調査を行うためには、まずその国の言葉を理解する必要があるから」と国際大学としての利点を語った。

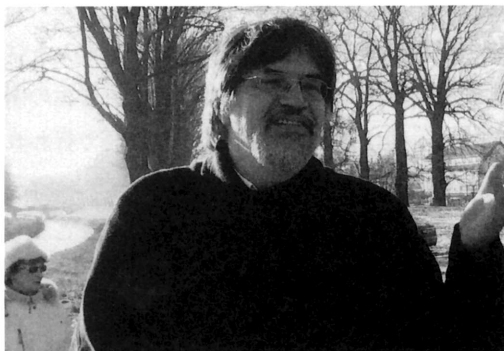
またこの地域には2ヶ国共同の小学校が2校あるという。基本的にはドイツの学校はドイツの生徒が中心であるが、週に1回国境を越えてチェコ側のリベレッツ Liberec を訪問し、チェコ語の基本単語などを学ぶという。

現在は買い物など、表面的な部分にとどまっている交流であるが、次の世代となるドイツ、

¹³ 以下のホームページを参照：<http://www.ihl-zittau.de/> および http://de.wikipedia.org/wiki/Internationales_Hochschulinstitut_Zittau

ポーランド、チェコの生徒や学生が、一緒に互いの文化や伝統、祝祭、慣習、料理を学ぶことで互いをもっと良く理解することができる。恋愛関係も含めてこうした交流を経験した新たな世代が今育ちつつある、とレール教授は今後の期待を語った。

一方、この地域の経済状況については見通しは必ずしも明るくない。教授によれば、東ドイツ時代の繊維産業や褐炭生産、タービンやトラックの製造などは競争力に欠けるため、すべて再統一後に閉鎖されたという。その結果失業率が上昇し、人口の3分の1が流出したという¹⁴。とりわけ高度な技能を持った働き盛りの人々が町を離れるのが深刻な問題だと語った。



インタビューに答えるレール教授

教授によれば、かつてツィッタウはたいへん豊かな都市で、旧市街は今も歴史的な文化遺産が数多く残る。しかし旧市街の補修や維持には多額の予算が必要となるため、なかなか修復が進まないのが現状である。居住者のいない空き家は旧市街の50パーセントに及び、その総面積

は200平方メートルに及ぶという。前日私たちが訪ねたゲルリッツについても、多額の資金が投じられて修復された歴史的建築物もあるが、多くの家が空き家になっている状況には変わらない、と説明してくれた。

それではこうした状況が国境開放で改善に向かうかとの私の質問に対して、レール教授はチェコ側のリベレッツの経済状況との比較から説明を始めた。リベレッツは地域経済の中心地で、失業率は2パーセント以下。専門職の求人が絶えないという。かたやドイツ側のツィッタウの失業率は公式の統計で26パーセント。実際はそれ以上と推測される。したがって、いまだ賃金格差こそあるものの、確かな職業資格を持っていれば、ドイツ人が国境を越えて働きに行くことは原則的に難しくないとのことである。

また両国の物価も国際的な経済構造の中で平準化しつつある。最近の調査によれば、多くのチェコの国民が国境を越えたドイツ側のスーパーマーケットで買い物をするという状況が生まれている。あるいはポーランドのヴロツラフなども物によって物価はかなり高くなっている。したがって今後はこの地域を大きな経済圏として考える必要がある、とのことであった。

かつては南北および東西を結ぶ通商路の交差点として繁栄したゲルリッツやツィッタウが、戦後の冷戦体制の中、人工的な国境により分断され、人々も国家単位の考え方に慣れてしまった経緯を振り返りながら、レール教授は国境を越えた新たな枠組みにかすかな希望の灯を認め

¹⁴ 1950年に47,000人を数えたツィッタウの人口は、再統一以後も高い失業率と出生率の低下によりおよそ12,000人減り、現在約25,000人となっている（再統一直前の1988年末は38,000人、直後の1990年末は34,000人）。減少傾向は続き、2020年には21,000人に減ると予測されている。<http://de.wikipedia.org/wiki/Zittau>

同じくゲルリッツも漸減傾向が続き、1949年には東部からの避難民を抱え10万人を越えた人口も、1989年までには75,000人に減少した。産業の沈滞もあって2006年には57,000人と、再統一以来約20パーセント減少している。<http://de.wikipedia.org/wiki/Görlitz>

ていることが窺えた。

検問所の橋を渡った先にはポーランドの煙草屋があり、「最大で60パーセント割安」などとドイツの消費者にアピールしていた。私が眺めている間にもツィッタウ側から若者が歩いてきて、煙草を買うなり戻って行った。経済的にも統合が進み、種々の格差が縮まれば、こうした商店もやがては消えていくのであろう。



国境検問所近くのポーランドの煙草屋

このように今回の国境開放は自由な移動や交流の促進および経済活動の発展という面から、おおむね歓迎されていたものの、国境地帯の市民の中には車輛盗難、麻薬の密輸や人身売買など、犯罪が増加するのではないかと根強い不安があったのも事実である。

11月22日の時点では警察労働組合（GdP）も、安全性の観点から見れば国境開放は時期尚早であるとし、東欧諸国の国境検査の低い水準を指摘しながら、ブランデンブルク州とザクセン州で連邦警察官を850人、州警察官を1,000人削減する計画を「まったく無責任」と批判していた。そしてポーランド国境のフランクフルト・アン・デア・オーダーで、およそ300人（主催者発表）

の警察官が「国境開放には賛成、しかしテロと犯罪のフリーパスは許すな」とのスローガンを掲げて抗議のデモを行なっている。¹⁵

ショイブレ内相はこうした市民の不安に応え、「国境検査を廃止しても移動式の国境監視を行うため安全上の損失にはならない」とたびたび説明してきた。¹⁶ これは警察官を増員して国境から30km圏内をパトロールすることを指す。ドイツ連邦警察も国境検問所に「検問なき旅行—安全を維持しつつ」Kontrollfreies Reisen – mit Sicherheit というポスターを掲げ、国境検査の廃止後も引き続き国境地帯において目に見える形で任務に当たり、社会の治安と秩序を守る旨をアピールしていた。

また欧州委員会のバローゾ委員長は拡大当日21日のザクセン新聞に寄稿し、国境検査を廃止しても「安全上のリスクを防止する有効な施策が講じられるため、欧州は以前より安全になる」と説いた（巻末資料参照）。

しかしマスメディアの報道などを見る限り、一般市民の心配が払拭されたとは思えない。実際私たちが利用したツィッタウとパウツェンのタクシー運転手も、国境開放について「良い面と悪い面が半々」と答え、犯罪の増加を懸念していた。

このような市民の不安感に訴えていたのが極右民族主義のドイツ国家民主党（Nationaldemokratische Partei Deutschlands, 略称 NPD）である。ツィッタウの国境検問所前に停まっていた警察の車にも同党ザクセン州議員団のパンフレットが配られていた。このパンフレットによれば、NPD はまず国境管理という国家主権

¹⁵ 2007年11月22日 AFP 通信ニュース “Schäuble verteidigt Grenzöffnung zu Osteuropa”

¹⁶ 2007年9月28日 AFP 通信ニュース “Schäuble: Erweiterung des Schengenraums kein Sicherheitsproblem” および11月22日 AFP 通信ニュース “Schäuble verteidigt Grenzöffnung zu Osteuropa”

の委譲に反対する。そして「国境検査の廃止は外国人の増加、犯罪の増加、失業の増加、安全の低下を意味する」などとセンセーショナルに訴え、シェンゲン圏拡大に反対するばかりか、ドイツのシェンゲン圏脱退までも主張していた。¹⁷ またテレビニュースによれば、この日ポーランドの民族主義者も国境に集まり、検問の廃止に抗議したという。緑の党ばかりか、欧州統合に反対する右翼も、結果的に国境を挟んで連帯しているという皮肉な状況が面白い。

レール教授は犯罪率の増加に対する市民の不安について、その可能性は排除できないと認めつつ、「しかしもっと他に豊かな都市があるというのにこのツィッタウで何を盗むというのか」などと一笑に付した。何よりも国境検問の代わりの移動パトロールによって国境地帯の監視がむしろ強化されることや隣国との情報データの交換が行われることを挙げ、犯罪者の越境が必ずしも容易になるわけではないとの見解を示した。またこれより先にインタビューした緑の党のメンバーも「一種のヒステリーに陥らないよう慎重な態度が必要」と冷静な反応を見せた。

その後、同行の北村君のたつての希望でドイ

ツ・チェコ・ポーランドの三ヶ国国境を訪ねることにした。検問所から南に歩くこと40分、ナイセ川のほとりに開けた美しい草原がそれであった。左岸にはドイツの国旗、右岸にはポーランドとチェコそしてEUの旗が翻っている。EU拡大当日の2004年5月1日には、ドイツのシュレーダー首相、ポーランドのミレル首相、チェコのシュビドラ首相が集い、ポーランド、チェコを含む新規10ヶ国の加盟を市民とともに祝った場所である。今はドイツ側には訪れる人もなく、対岸にわずかに記念写真を撮る人の姿を見かけるのみであった。冬の澄み切った青空のもと、普段と何ら変わることもない長閑な岸辺のたえずまいに、あらためて「国境を越えた新しい関係などは以前から始まっており、今日の国境開放式典はむしろ象徴的なものに過ぎない」とのレール教授の言葉が思い返された。



ツィッタウの市庁舎と市場(ヨハネ教会の塔より)



三国国境地点

帰りに訪ねたツィッタウの旧市街でもレール教授の言葉を思い出すことになった。市の中央の市場には、ドイツ・ロマン派を代表する建築家であり画家のカール・フリードリヒ・シンケルの設計による、イタリアルネサンス様式の市庁舎が立ち、バロックやロココの都市貴族の邸

¹⁷ ここで配布されていたNPDのパンフレット「国境検査に賛成！」Ja zu Grenzkontrollen! は次のURLからPDFファイルで読むことができる：<http://www.npd-fraktion-sachsen.de>

宅が並ぶ。これまたシンケルの設計によるヨハネ教会 Johanniskirche の塔から見下ろす旧市街は、うっすらと雪化粧して実に美しい。しかし、旧市街から駅に通じる駅 ^{バーンホフス シュトラッセ} 前 通りに足を踏み入れると、「売家」と書かれた灰色の建物が目につく。それも3階から4階建の大きな建物ばかりなのである。ツィッタウは地方路線とはいえゲルリッツを経由しコットブスを結ぶラウジッツ鉄道の起点である。そのいわば目抜き通りのこうしたさびれように、レール教授が説明してくれた労働力流出の進む国境の町の現実が如実に現れていた。ラウジッツ鉄道は駅名や車内サービスなど、すでにドイツ語、ポーランド語、チェコ語の三ヶ国語表記が行われている。緑の党のメンバーが主張するように、国境を越えた都市間鉄道や地域路線の拡充に活路が見出せることを期待したい。



ツィッタウ駅前通りの空き家

さて午後3時半ごろツィッタウ駅で帰りの列車を待っていると、警察官2人が近づいてきた。強いザクセン訛りで「パスポート拝見」という。なるほどこれが検問所での検査に代わる移動式国境監視かと尋ねると、微笑みながらその通りと答えた。待合室にはほかにも2、3人お客がいたが、検査を受けたのは明らかに外国人と分かる私たちだけであった。国境開放の当日から

こうして「目に見える形で任務に当たる」のは、不法入国に対する抑止効果だけでなく、国境地帯の市民に対して安全をアピールする意味があるのではないかと推測した。

翌22日はバウツェンを発ち、ドレーズデン経由でチェコのプラハを訪ねた。ユーロシティー(EC)の車内ではもはや出入国検査はなく、前日の移動式検査にも出会わなかった。18年前ドイツ再統一直後にベルリンからポーランドを訪ねたときは、車内でドイツ側の出国審査に続いてポーランド側の入国審査があり、その瞬間に周りのポーランド人乗客が会話をポーランド語に切り替えたのに驚いたことを記憶している。否が応でも国境を意識する瞬間であった。しかし今回はエルベ河を遡りつつ、地図で逐一地名や駅名を確認しなければ、もはや国境と気づくこともない。西欧で経験するこの当たり前の状況が中欧でも実現したことに、ベルリンの壁崩壊後の欧州統合の歩みをあらためて感じたことであった。

4. エピローグ — 拡大後の国境地帯の変化

12月26日の帰国後、シェンゲン圏拡大に伴う国境地帯の変化に関して、いくつかニュースが伝えられた。

まずは渋滞の解消である。ベルリンから国境のフランクフルト・アン・デア・オーダーに向かうアウトバーンA12ではこれまで国境検査のため、時には国境の手前30kmまでトラックの渋滞が続き、その渋滞による事故も多発していた。しかし12月21日を境に渋滞は完全に解消され、交通はスムーズに流れているという。

また国境検査による遅延がなくなったため、国際的な取引を行う会社は製品輸送の負担が軽

減され、期日どおりの納品が可能になったという。さらに国境地帯ではドイツの不動産に対するポーランド人の関心も高まるなど、経済的にも良い影響が現れ始めている。¹⁸

一方、市民が最も恐れていた不法入国や犯罪の増加はどうであろうか？12月26日の朝日新聞はドイツ通信社(DPA)のニュースとして、12月24日にポーランド経由でドイツに不法入国しようとしたチェチェン共和国の亡命希望者59名が拘束されたと報じている。また2008年1月2日のAP通信はロストック管内でロシア人10人を含め28人が拘束されたと伝えている。しかし総数についての発表はまちまちである。ドイツ内務省の広報官は1月11日、拡大当日からドイツの東部国境で逮捕された不法入国者は425人と発表した。しかしビルト紙 Bild は連邦警察の内部情報として1月2日までに614人が捕まったと伝え、2007年上半期全体の484人と比較して不法入国者が激増したと報じている。ドイツ警察労働組合(GdP)や連邦警察組合(BGV)も不法入国者の急増に警鐘を鳴らしている。¹⁹

こうした数字をどのように解釈するかー氷山の一角と見るか国境を越えた警察協力の成果と捉えるかーはさておき、全体として拘束された不法入国者の数が増えたことは事実と見られる。

しかしながら、最も懸念された犯罪発生率に変化がないことではどの報道も一致している。シオイブレ内相によれば、国境のブランデンブルク州やメクレンブルク・フォアポンメルン州など各州から犯罪率が上昇したとの報告は上がっ

ていないという。²⁰

片や不法入国者の増加、片や犯罪発生率に変化なしという状況はどのように考えたら良いのだろうか。「不法入国は第一波に過ぎず、請負業者はどのような可能性があるかを探っているところだ」という警察労働組合の見方も否定できない。²¹ しかしむしろ「不法入国者のうち犯罪者はごく一部」というライニシェ・ポスト紙の見方(巻末資料参照)をとるべきではないだろうか。

いずれにせよ、EU加盟国内相は1月25日の理事会でシェンゲン圏拡大の最初の総括を行い、「完全な成功」と評価した。ドイツ政府も「ドイツに関してはいずれの心配も杞憂に終わった」と発表している。²²

本稿をほぼ脱稿した3月5日、メクレンブルク・フォアポンメルン州議会で、シェンゲン圏拡大から2ヶ月の中間総括が行われたとのニュースが入った。それによれば犯罪率に大きな変化は見られず、社会民主党(SPD)、キリスト教民主同盟(CDU)、左派党(Linke)、自由民主党(FDP)の代表はいずれも、国境地帯でドイツ・ポーランド双方に良い経済効果が生まれたことを称賛したという。4月にはポーランドのシフィノウィシチェ Swinoujscie/Schwinemünde まで鉄道が延伸される。またメクレンブルク・フォアポンメルン州と、隣接するポーランドの西ポンメルン州との間で税政上の協力関係が始まる。地域間の経済協力も強まり、国境を越えポーラ

¹⁸ 2008年1月2日 AP 通信ニュース “Weniger Staus an der deutsch-polnischen Grenze”

¹⁹ 2008年1月11日ドイツ通信社(DPA)ニュース “Regierung: Nur leichter Anstieg bei illegalen Einreisen”

²⁰ 同上。

²¹ 2008年1月2日 AP 通信ニュース “Weniger Staus an der deutsch-polnischen Grenze”

²² 2008年1月25日 AP 通信ニュース “EU-Innenminister werten Schengen-Erweiterung als Erfolg” および同日AFP 通信ニュース “Bundesregierung nennt Schengen-Erweiterung “grossen Erfolg”

ンドのシチェチン地区で働くドイツ人も増える一方、メクレンブルク・フォアポンメルン州で起業するポーランド人も出てきており、国境の町レックニッツ Löcknitz ではすでに80件が登録されたという。²³ 緑の党のメンバーの希望やレール教授の展望はすでに現実のものになりつつあるのだ。

顧みればドイツとポーランドのオーデル・ナイセ国境は、ドイツ再統一後の1990年11月に両国間で国境条約が結ばれるまで、実に45年の長きにわたり大きな懸案として両国の善隣関係を阻害してきた。とりわけシュレージエンや東プロイセンなど、東部から難民としてドイツ本国に逃れてきた人々は、戦後故郷放逐者同盟を結成し、声高に領土返還を要求した。領土問題は東西の冷戦構造もあって戦後の四半世紀ほぼ膠着状況に置かれた。西ドイツが事実上オーデル・ナイセ線を認めたのは、1970年のヴィリー・ブラント首相の東方外交を待たねばならなかったのである。

このような状況の中、戦後西ドイツの作家は創作や政治活動を通して国境を越えた相互理解を訴え続けた。ダンツイヒ（グダニスク）生まれのギュンター・グラス（1927-）は、長編『鈴蛙の呼び声』（1992年）などの作品を通して、一貫してドイツ、ポーランド両国の対話と和解を呼び掛けている。またグラス同様故郷を失った東プロイセン・マズーレン地方出身のジーク

フリート・レンツ（1926年-）も故郷放逐者同盟から距離を置き、すでに1969年の時点でオーデル・ナイセ線の承認に賛成を表明し、長編『郷土博物館』（1978年）の中で登場人物にこう語らせている。

「私は皆さんの美しい故郷を知らないわけではありません。（中略）しかしすでに何万というポーランド人がそのマズーレンに生まれています。この土地を自分たちの故郷と見なしている、あるいは見なさざるを得ない人々です。力づくでそこに帰還して彼らから故郷を奪い取るべきでしょうか。私は皆さんの美しい土地を知っています。今ではそれは隣人の土地です。私たちは無関心ではられません。しかし私たちに残されている道はただひとつ、昔の故郷への憧れを新しい隣人関係の中で昇華させることです。」²⁴

30年前にレンツが望んだドイツ・ポーランドの「新しい隣人関係」は、冷戦体制の崩壊、ポーランドなど中東欧諸国のEU加盟を経て、今回のシェンゲン圏拡大により新たな段階に入ったと言える。「故郷を持つとしたら誰にもどこにでも決められるんだ。ほかの人にはその希望を阻む権利なんてないんだよ」という『郷土博物館』の登場人物の主張も、欧州統合の進展とともにいよいよ現実味を帯びてきたと考えるのは時期尚早であろうか。

²³ 2008年3月5日 DDP 通信ニュース “Ringstorf: Schengen-Beitritt Polens bringt Vorteile”。ヴェルト紙によれば、数年前からメクレンブルク・フォアポンメルン州にはおよそ1000人のポーランド人が移住しているという。レックニッツのドイツ・ポーランド・ギムナジウムには毎日160人の生徒がポーランドからバスで通学している。パーゼヴァルクの病院にはポーランドから医師が通い、シュヴェット Schwedt のヨーロッパ最大級の再生エネルギーセンターにはポーランドのトラックが原材料を運んでいるという。（“Noch normaler als bisher” Die Welt vom 21.12.2007）

²⁴ Siegfried Lenz, “Heimatismuseum”, Hoffmann und Campe. 1978. S.600

後記：

今回の視察では現地で多くの人々にお世話になった。身を切るような寒気の中、長時間のインタビューに応じ、ビデオ撮影も快く了承いただいたフランク・フォン・ヴェトケ氏 Frank von Woedtke らザクセン州緑の党の方々，およびルドヴィク・トミャウォイチ教授 Dr. Ludwik Tomialojc らポーランドの緑の党の方々，ならびに国境地帯の教育・文化交流や経済状況に関して詳しい説明をいただいたアルブレヒト・レール教授 Dr. Albrecht Löhr に心からの感謝を捧げる。また長時間のインタビューの最中，凍える指先でビデオカメラを回し続けた北村尊義君にも記して感謝の意を表したい。彼の協力がなければインタビューの内容を正確に再現することは難しかったからである。

【資料】

シェンゲン圏拡大については多くの新聞が社説で論じている。その中から興味深いと思われる2紙の社説と、拡大当日のバローゾ欧州委員長の寄稿を以下に紹介しておく。

2007年12月21日（金）

私たちの望む欧州

ルーヴェン・シェレンベルガー

（フランクフルター・レントシャウ紙社説）

自由と移動—これがEUを懐疑論者にとっても魅力的なものにしている。

本日新規9ヶ国の国境検査が廃止される。

EUはその多様性を存分に活かせば、市民の心を捉えることができる。

欧州統合を専門職にする人々は飽くことを知らない人々である。数年前から様々な委員や長官や議員は、どうしたらEUを市民に身近なものにできるかという問題で頭を悩ませてきた。彼ら自身はEUに対してもはや不安を抱かず、欧州統合の理念に魅了されているため、一般のヨーロッパ市民が一切の欧州統合の問題に最初から耳を貸そうとしないことに、日々ますます苛立っている。それゆえ政治家や官僚は大がかりな世論調査を実施し、調査報告書を作成し、PRキャンペーンを考え、情報窓口を設ける。しかしこうした作業のほとんどは徒労で、少なくとも目に見える成果は得られていない。

今日は、本来統合が欧州市民の心を容易に掴むことができるものだということがEUが示す一日となる。今日からポーランドとチェコ、ならびにマルタ、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ハンガリー、スロヴェニア、スロヴァ

キアの国境検査が廃止される。これはヨーロッパがまた一步結びつきを強める日であり、EUが人々の生活を楽にする日である。すなわち欧州市民が望むような統合である。

もちろんこのいわゆるシェンゲン圏の拡大にも大きな不安がつきまとう。たとえば警察は、ロシアやウクライナとのEUの外の国境が、高度な組織犯罪や国際的な薬物取引・人身売買に対する十分な防衛線になるかを懸念している。国境地帯の多くの自治体でも、既EU加盟国の住民はとりわけ彼らに関わる身近な問題を恐れている。自分たちの車の盗難の心配である。この不安はまったく新しいものではない。1990年代にも多くの新規シェンゲン協定加盟国、とりわけ南欧の国々に対して、同じような形で持ち出されたものである。しかし実際は内の国境開放によって安全が脅かされたことはなく、EUは一層開かれ、寛容になったのである。したがって今回も不安を抱く理由はない。

シェンゲン協定がこれほど大きな成功を収めたことは、深い自己疑念に基づく最近の欧州統合の歴史と一部対応している。ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクは、1985年にモーゼル河の船の上でこの協定に調印した際、あたかもこの協定に自信が持てないでもいうように、政務次官しか調印式に派遣しなかったのである。協定全体が上手く行かない場合を考えれば首相が臨む必要はないと考えたためである。しかし国境開放は欧州市民の心を捉えた。アイルランドと英国を除けば、誰も後悔する者はいなかったのだ。それどころか、EUへの加盟に踏み切れないノルウェーやアイスランド、またスイスさえも、この安全圏に合

流した。

EU にとって最大の不運は、機構組織として欧州市民のこの喜びからほとんど恩恵を受けられないところにある。つまり欧州市民はきわめて貪欲で忘れっぽい人間なのだ。国境の開放はおそらく祝うことだろう。また入国の際に検問所の一つで時間を無駄にしないで済むことも、日々嬉しく思うだろう。しかしだからといって欧州議会選の投票に行くだろうか。次の国民投票で欧州統合に賛成の票を投じるだろうか。これは疑ってかかっても良い。またユーロについてもこの間、心から受け入れているにも関わらず、オランダとフランスの国民は欧州憲法を阻止したのだ。

それでもこう問いかけるのが良いかもしれない。なぜ境界のない欧州は、EU 懐疑論者をも巻き込むこのような魅力を発するのかと。もちろん一つにはシェンゲン協定が自由と移動への欲求を満たすからである。EU はこの問題では人々に従っている。その反対ではない。しかも欧州の特徴であり欧州を他に類のないものとしている多様性は失われていない。国境開放によってポーランドがドイツ的になることもなければ、ドイツがポーランド的になることもない。しかし両者は一層互いを知り、互いを受け容れることだろう。

これは、ブリュッセルの EU 本部が口やかましく私たちに指示する欧州、すなわち同一水準と同一商品表示の欧州とは異なる、別の欧州である。標準規格の欧州は経済のみならず、しばしば消費者にとっても役立つ。しかしそれは各国の特殊性を脅かすことにもなりかねない。それは加盟国ばかりか欧州のアイデンティティー

にとって重要な特殊性である。もしかしたら EU 本部はシェンゲン圏拡大のお祝いの日に、自らの大きな成功から何事かを学び、小さな問題では欧州をあるがままに任せることを覚えるかもしれない。そうならば私たちは喜んで駆けつけ、驚きの目で統合を見渡すことになるだろう。

原題：Europa, wie es uns gefällt

Von Rouven Schellenberger

Frankfurter Rundschau vom Freitag, 21. Dezember 2007

2008年1月11日（金）20:54

不法入国者

アレクサンダー・フォン・ゲルスドルフ

（ライニシェ・ポスト紙社説）

開放された国境は安全でない国境である。年間 1 万人以上の人間が東欧から「黄金の西欧」に不法入国を果たしている。12月21日の旅券検査の廃止以来、不法入国者にとってドイツに来るのはさらに容易になった。人身売買や自動車泥棒の犯罪グループにとって、シェンゲン協定の適用拡大は文字どおりクリスマスプレゼントとなった。

しかし、ポーランドとチェコに通じる国境の完全開放は、正しい時点での正しい施策である。ほかならぬアメリカ合衆国がメキシコとの国境の柵をいよいよ高くし、検査を日々強化している時期に、EU はその反対のを行なっているのだ。すなわち、すべての欧州市民にエストニアからポルトガルまで完全な移動の自由を保証するというのである。

ドイツ・ポーランド国境での数キロメートルに及ぶトラックの渋滞は、一夜にして解消された。これは少なからぬ意味を持つ。なぜならポーランドはドイツの輸出産業にとって巨大な中国よりも重要であるからだ。

品物やアイデアが自由に行き来するという国境開放の恩恵は、ごく少数の不法入国者による損害を何倍も上回る。ちなみにその不法入国者のうち、犯罪者はごく一部なのである。EUとりわけドイツはこの決定を誇ってよい。

原 題：Rheinische Post: Illegale Einwanderer
Kommentar Von Alexander von Gersdorff

2007年12月21日

欧州は国境検査廃止でも以前より安全に

欧州委員会委員長ジョゼ・マヌエル・バローゾ
(ザクセン新聞 寄稿)

2007年12月21日は9ヶ国で国境検査が廃止される記念日となる。この日以降市民はエストニア、ラトヴィア、リトアニア、マルタ、ポーランド、スロヴァキア、スロヴェニア、チェコ共和国、およびハンガリーに拡大した完全な移動の自由を享受できる。これにより人々はポルトガルからエストニアまで、またスロヴァキアからフランスまで、中断されずに移動できるのだ。

市民にとって実質的な利益は大きいであろう。検査が引き起こす渋滞による国境での遅延はもはや解消される。企業は経費縮小の恩恵を受ける。欧州にとっては、真に自由で、安全、公正な空間に向けた重要な一歩を意味する。

私たちは、国境検査がなくなれば自由が拡大

するだけでなく、安全も低下するのではないかという市民の不安を理解している。しかしそれは杞憂である。域内国境における検査廃止とともに、安全上のリスクを防止する有効な施策が講じられるため、欧州は以前よりも安全になるのだ。

犯罪追跡手段は狙いを定めて運用することができる。市民ひとりひとりを渋滞と検査で煩わす代わりに、私たちは本来監視の目を向けねばならない人々に集中することができるのである。今回シェンゲン協定に加盟する9ヶ国はこの2年間、きわめて重要な分野、すなわちEU外縁の国境での検査や査証政策、警察間協力において取り組みを厳しくしてきた。そして盗品や捜査・捜索対象の人物に関する情報交換を行うシェンゲン情報システムに完全に加盟したのである。

専門家は現地でたびたび調査を行い、手薄な箇所を一つ残らず解消した。これにより所轄の内務相や司法相は今月初めに9ヶ国のシェンゲン圏加盟を承認することができたのである。

シェンゲン圏の拡大により、1989年秋に始まった欧州大陸の再統一がさらに前進する。これは自由な大陸の自由な人々にとっての勝利である。私たちは欧州市民に対して、この自由を利用し祝うよう求める。そして北から南、東から西まで欧州の持つあらゆる多様性を発見するよう呼びかける。今後は市民にとって新規加盟国の国境を越えることは小さな一歩に過ぎなくなるだろう。しかしこれは欧州にとっては何と大きな一歩であろうか！

原 題：Europa wird trotz Wegfalls der Kontrollen
sicherer als zuvor

Von Jose Manuel Barroso (Präsident der EU-Kommission)

Sächsische Zeitung vom 21.Dezember 2007